

安能
務

中華 帝國志

權謀術數篇

中



ちゅう か ていこく し ちゅう けんぼうじゆつすうへん
中華帝国志(中) 権謀術数篇

あ の つとむ
安能 務

© Tsutomu Ano 1993



講談社文庫

定価はカバーに
表示してあります

1993年10月15日第1刷発行

発行者——野間佐和子

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112-01

電話 出版部 (03) 5395-3510

販売部 (03) 5395-3626

製作部 (03) 5395-3615

Printed in Japan

デザイン——菊地信義

製版——豊国印刷株式会社

印刷——豊国印刷株式会社

製本——株式会社上島製本所

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。
送料は小社負担にてお取替えします。なお、この本の内
容についてのお問い合わせは文庫出版部あてにお願いい
たします。(庫)

ISBN4-06-185499-2

本書の無断複写(コピー)は著作権法上での例外を除き、禁じられています。



講談社文庫

中華帝国志 (中)

権謀術数篇

安能 務

講談社

目次

第一八章	横槊の詩人 おうさく
第一九章	歴史の虚構
第二〇章	乱世の倫理
第二一章	桃園の結義
第二二章	雲霞の大軍
第二三章	乱世の姦雄
第二四章	柳下の折檻
第二五章	七星の宝刀
第二六章	馬中の赤兎
第二七章	常山の子竜
第二八章	剝製の皇帝
第二九章	張飛の計略

231	212	192	172	151	128	106	85	65	46	26	7
-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	----	----	----	---

第三〇章	山賊の陰徳
第三一章	謀反の存念
第三二章	魯肅の見識
第三三章	劉備の耳朵
第三四章	王業の偏安
第三五章	皇帝の研修
第三六章	皇帝の悪癖

中華帝国志(中)

権謀術数篇

第一章 横槊^{おうさく}の詩人

さて、いよいよ「三国時代」が始まる。いや「三国志の世界が幕を開けるぞ」と言い換えたほうが「おお！　そうか。待ってました。よく知ってるぞ」と、あちこちから声が掛かるかも知れない。

言うまでもなく三国志の世界とは、三国時代を記した史書「三国志（正史と演義）」に描かれた歴史社会のことである。なぜか中国人と同様に日本人も、中国史の中では取り分け三国時代が好きで、そこに登場する英雄豪傑に尽きない興味を抱いて来た。それゆえ、その英雄豪傑たちの活躍する歴史舞台としての三国志の世界（断代史）に通曉^{つうぎょう}している。

たしかに断代史としての三国時代は、治乱興亡、権謀術数、離合集散の模様を鮮明に、浮き彫りにしたような興味深い時代であった。そして一般には、中国三千年史をそこに圧縮したかのような——これぞ中国の歴史！　と思わせる痛快な物語に満ちた時代である。

だが、長い中国史の流れにおける「一つの歴史時代」としての三国史は、その実、大きな変革期の曲り角に位置した、視野の悪い難解な時代で、プロの歴史家の手にも負えない時代であった。それほど史料が錯雑して、しかも政治的にも思想的にも、よくよくヒネた時代である。

したがって、これが三国史の標準的な解釈だ、これぞ真正正銘の「三国史」でござる——と万

人が納得出来る定説は、いまだに存在しない。

だからであろうか。昔から巷間の人々の間に三国志の世界の真相を探究する動きは活発で、三国志の研究は隆盛をきわめた。いや現在でもなお、その勢いが衰える気配はない。

それはそれで大へんにけっこうなことである。しかし残念ながら、三国志の世界に通暁するとは、そのまま三国史に精通することではない。いや初めから、断代史の中に埋没しては「歴史」の真実の姿を見ることは出来ないのである。

それは例えば、ある一つの山に分け入ってどれほど丹念に調べ回っても、ただそれだけでは、その山の属する山脈の姿は見えてこないのと同じことだ。ましてや三国史を中国二千年史の縮図として理解するのに、三国志の世界に埋没すれば、逆に中国史の姿を見失なうのが落ちである。

三国時代は単に中国史を構成する一つの時代ではなく、定石通りの展開を示さず、尋常な発展を遂げなかった。それは、その異様な幕開けと奇妙な結末を見ただけでも明らかである。

言うまでもなく三国時代は、一つの中国が三つに分裂した時代であった。そしてそれは、群雄割拠の局面から始まる。後漢王朝の統一的な支配権力は、すでに崩れ去り、フアンパン皇幫とスパン士幫の組織は疾うに瓦解して、官場は久しく廢墟と化していた。

もし歴史が尋常に展開していれば——その治乱興亡の掟と易姓革命の原理によって——当然に、そこで「中原に鹿を逐う」競技が行なわれたはずである。そして我が輩が天下を定めるのだ！ と大見得を切る野心家たちが、颯爽と歴史の檜舞台に登場する場面であった。

だがこの時、その政治的な廢墟に立った英雄豪傑たちは、なぜか顔を見合わせて、徒らに天下

の形勢を觀望しながら逡巡する。それ行け！ と馬に笞を入れて猛然と跳び出す者は、ついぞいなかった。

それらの英雄豪傑たちに、野心がなかったわけではない。資質や氣慨、あるいは霸氣に欠けていたからでもなかった。ありていに言えば、歴史の方向を見失っていたのである。政治的な決断がつかず、対応に迷っていたのだ。

だからとて、彼らは何もなかったわけではない。先ずは懸命にそれぞれの足場を固め、そして、せつせと縄張りを広げた。当然に兼併が行なわれて、相互淘汰が始まる。

やがて、天下は三分された。そして暫くは、そのまま鼎立ていりつが続く。さらに、二度にもわたる——子供騙しだまのような——「禪讓」の芝居を経て、ついに三国は統一された。ようやくにして三国時代はその幕を閉じたのである。

そのようにして、一つの歴史時代は、確とした変革の展望がないままに幕を開け、茶番劇にも似た禪讓の儀式をもって幕を閉じた。始まりが宜しくなければ終りも悪いという。まさしくその通りになった。いかにも「冴えない」時代の始まりに見合った「締まらない」結着のつけ方である。なんとも間延びした時代であった。

易姓革命による王朝の交替は、統一権力の崩壊に基づく乱世を收拾する「天經地義」な、つまり絶対に間違いない歴史変革の手段である。

だがなぜか、彼らはそれを避けて、帝位の禪讓という古代神話を復活させ、その助けを借りて

事態を收拾した。そうせざるを得なかったほどに、三国時代の歴史的な状況と政治情勢は、混沌を極めていたのである。

もとより禪讓の儀式は、統一権力の正当性を主張し、王朝の基盤を強化するための芝居、いや呪いであった。だが、その折角の呪いも結局は期待された効果を顕わさず、徒らに混沌を歴史の上に延長し拡張させただけである。すなわち三国は統一され、新しい王朝（西晋）が樹立されて、一時的に歴史的な小康状態を出現させたが、それも東の間のこととて、結局はそれが、その後続く長期な三百年にも及ぶ大分裂時代（南北朝）の始まりとなった。

たしかに、政治は演劇の一型式である。しかし演劇は政治を誤魔化することが出来ても、真に問題を解決することは出来ない。それを彼らは百も承知のはずである。にも拘らず彼らは、あえて、その効果を期待すべくもない芝居を打った。

もとよりここでも、彼らは徒らに茶番を演じたわけではあるまい。やはり、そうすることの他に時代を制御し操縦して、歴史に対応する術がなかったのだ。初めに「易姓革命」を避けたツケが回って来たのである。いや、それほどまでに社会人倫は紊乱し、政治思想は混乱して、人心の荒廃が甚だしかったのだ。

もちろん、そうした紊乱や混乱や荒廃は、それこそ「乱世」の側面で、三国時代に特有な現象ではない。だが、それにしても三国時代のそれは桁外れである。なかなしく人心の荒廃は凄まじかった。

ほとんど信じがたいまでに、人間の相互不信が根を張っていた時代である。人々は互いに、て

んで相手の示す好意や誠意を本気にはせず、取り交わされた約束をすら、頑なに信じようとはしなかった。

それはまことに困ったことである。信がなければ社会は成り立たず、政治は動かない。それで世の英雄豪傑たちは、なんとか信用してもらおうと工夫を凝らした。そして、誠心や誠意を認めてもらうために泣き、約束を果たす用意のある証を立てるため戦場に恩賞の金銀財宝を運んだものである。

たしかに、男が「泣く」ことには、それなりの効果があった。いや、それ自体がすぐれた政治的な技術の一つである。しかし、それにしても三国時代の英雄たちは——その史書を読みながらウンザリするほどに——とにかく実によく泣く。それも、ただ涙を流すのではない。「放声大哭、昏絶於地」というから、大声を張り上げて慟哭し、泣き崩れて地べたに卒倒（昏絶）するほどの凄まじい泣き方であった。

しかし泣くことが、たとえ政治技術の一つで、時代的な要求であったにしろ、三国という時代は、よくもまあ錚々たる泣き虫が揃ったものである。後に蜀国の皇帝となった劉備（玄德）は、その白眉であった。

そう言えば劉備は、三国時代随一の仁慈深い英雄と称えられたが、それは彼が頻繁に処かまわず「放声大哭、昏絶於地」したことで無関係ではなかったかも知れない。

それはともかく、人間不信の時代に配下を働かせ、人を使うのは大へんに骨の折れることだ。

例えば、重要な外交交渉で城を出る使臣に——成功したら存分に褒賞（ほうしょう）を取らせるぞ、などと約束

しただけではダメである。戦場に臨む武将や兵士に、戦功を立てたら相應の恩賞を賜るなどと誓約しても、それだけではなんの効果もない。

従来のように、戦功簿を用意して記録係にきちつと戦功を記載させ、凱旋したら朝廷で論功行賞を行なう、と文書で保証してもムダなことだ。誰も本気にはしないからである。

という次第で、外国に出かける使臣には、まとまった褒賞金を前金で渡さなければならなかった。成功すれば褒賞金はさらに増額され、失敗すれば、時にそれが弔慰金ちようゐきんとなる。へたすると乗り込んだ交渉相手の城や陣営で殺害される危険があったからだ。軍使や外交使臣を平然と斬り捨てることが流行していた、仁義もなくルールさえない時代である。いや、軍使や使臣を遣わして、実際には敵情を偵察させたり、謀略や煽動に従わせたりすることが、常識になっていた時代であった。それゆえ前金を渡さなければ、互いに安心がなかったたのである。

そして戦場では、意味は違うが同様にして、一つの戦場で戦功を立てた将兵には、いや斥候として任務を果たした場合でも、その都度それなりの褒賞を、その場で与えなければならなかった。そうしなければ命がけで任務を果たしたり、戦ったりしないからである。そのため軍を率いて戦場に赴く君主や総大将は、輜重車しちじゆうしゃに褒賞用の金銀財宝を積み込まなければならなかった。

いかにも現実的で、なんともややこしい時代である。いや当事者とすれば、きわめて単純直截で堅実なやり方であった。

三国志（演義）を繙ひもとくと、随所に「知遇の恩に報いて」という言葉が出て来る。この場合の知遇とは「相手を高く買つて、渡すものを渡す」ことだ。それが人間関係を律する基本、いや、す

べてであつたかのような時代である。

しかしここでも困つたことに、「知遇」には定まつた基準がなく、客観的な尺度がない。与える側が「存分に」と考えていても、受ける側が「足りない」と思うのが常である。それゆえ、「裏切り」が日常茶飯事のように横行した。いや連衡合従^{れんこうがつしやう}、離合集散が自在に行なわれていたのである。

因みに「桃園で結義した」劉備、関羽、張飛の「三人帮^{サンレンバン}」は、特異な例外として、終身その「義」を守り抜いた。この三人帮の人氣が高いのは、人々が、そこに稀少価値を見たからであるうか。

それはともかく、互いに氣疲れのする、そして懶げ^{ものう}な、うら悲しい時代ではある。

なぜか、三国時代は絵に描いたような乱世でありながら、しかも、中国史の「乱世」に特有な「熱氣」に欠けていた。

乱世の熱氣は、政治社会にある種の興奮を醸成する。それが英雄豪傑たちの夢と野望を掻き立て、人々の、わけても組織の崩壊した士帮の遊軍や予備軍の目を希望の彼方に向けさせて、善くも悪くも「変革」に対処する緊張感を作り出す。

だが熱氣の欠けた乱世は、どうしようもない政治の単なる泥沼だ。その泥沼に足を取られて、世の英雄豪傑たちの心に覇氣は燃え立たず、真に「武を用いるに地のない」まま、目先の利害に捉われて、ただ徒らに權謀術数^{もてあそ}を弄ぶ。

権謀術数とは、この場合——新しく大きなパイ（天下）を作り出すことではなくて——すでに幾度も述べたように、目の前にあるパイ（權益）の分配を巡る争いのことである。したがって人々は、その傍で右顧左眄しながら、いやでも視線を足許に落とす。身を保つことに汲々としながら、お零れを頂戴しようと右往左往した。

そのようにして、未来への展望が開けないままに、不条理な醜い生き様や争いが続けば、いやでも世相は厳しくなつて、人々は墮落し、魂は汚濁して窒息する。当然に人々は、その現実からの脱却を計つて、権力の世界から「老莊（老子と莊子）」の世界へと逃避した。汚濁した高貴な魂は浄化を求めて、詩の世界へ逃げ込む。

かくて三国志の世界に老莊の思想が漲る。そこへ、たまたま「文章は経国の大業にして、不朽の盛事なり」を唱える者が現われた。それが現実からの脱却を願う人々の耳に「乱世の福音」のように響く。

その言葉は、中国文学史上に残る画期的な名言となつた。その本義はともかく、もともととは時の思潮を克服するための提言である。この場合の「文章」とは、文学的な創意と、政治的な思想や哲学の反省に関わる「自前の思索と思考」を表白する著作のことであつた。「経国の大業」とは国家経綸のことである。「不朽の盛事」とは、不滅の偉業のことに他ならない。

すでに触れたように三国時代の英雄豪傑や士帮の遊軍と予備隊は、時勢に押されて時務を弁えず、知的な精進を疎かにして、前時代的な「徳行」を形の上で競い、それを売り歩いては、ひたすらに世間の「風評」を高めることにのみ腐心していた。

——そんなことに没頭していたのでは浮ばれまい。時局をしかと見定めて、時宜に適わない經典の「決まり文句」をなぞるのではなく、個性豊かな才氣溢れる「自分の言葉」を見付け出して、その言葉で時務を語り文章を書け。それが時局を救い、国家の経綸に資する業である。たとえそうでなくとも、人生は短いがそのようにして語られ、書き残された気品のある達意の文章には無窮の生命があるのだ。儚ない栄華を夢見て政治の泥沼で右往左往するよりは、文章を残すことのほうが、よほどマシですぞ——

と言った意味の提言である。まことに時宜を得た提言で、それにより心ある人々の目から鱗が落ちた。そして文学勃興の機運が起こる。

その機運に乗って、剣を筆に持ち替える者が現われた。戦陣の幕舎で詩作に興じた者もいる。自分の言葉で文を綴った者もいれば、古典に新たな生命を吹き込む注釈に励む者もいた。開き直って、ただ經典を読み返す者もいる。

そしてついに、いや象徴的に、後代に名を残す七人の優れた詩人——孔融、陳琳、王粲、徐幹、阮瑀、王瑒、劉楨が現われた。時は——年代記の上で——「建安」である。それで彼らは「建安七子」と呼ばれた。七人の先生、または大家という意味である。

その詩は「建安体」と称されて文学史を飾り、七子とその周辺で、世に「建安文学」と呼ばれる文学史上の金字塔が打ち建てられた。

三国時代の武將は——時代に制約されて——いま一つ冴えないところがあつたが、文士は恰好よく頑張ったのである。いや文武両道に秀でた英雄もいた。文武の両道に秀でることは、本来、